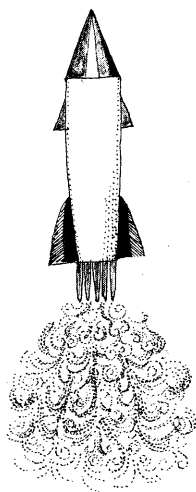


風のすがた

松井 とし



子どもは風の子。子どもたちの生活の中に、さまざまな風の姿を見ることができる。森林公園の広々とした緑の絨毯の上でたわむれる子どもたちのやわらかな髪に。咲きみだれるタンポポやしろつめくさをつんで歩く子どもの小さな手の先に。鯉のぼりをもって狭い園庭を泳ぎ回る子どもの、ふっくらとしたほっぺたに。

ある時こんなことがあった。陽の当たらない真冬の園庭で数人の子どもたちが両手を宙にのばして何か叫びながら駆け回っている。近づいてみると、砂をまきあげるつむじ風にむかって「風さん、お願いだから幼稚園のお砂を持って行かないで」と話しかけていたのであった。風と遊べることは、子どもであることの証ではないだろうか。

私は風が苦手だ。室内はほこりになるし、喉が弱いので強い風に吹かれると、うがい

励行していても喉を痛めることになってしまふ。加えて近年は、花粉を運ぶ春先の風に悩まされている。

しかし、『保育者』としての私は、子どもたちの生活の中になるべく風と遊ぶ機会を多く、と心がけている。紙飛行機や風輪も楽しいが、なんと言っても庄巻は風上げである。この時ばかりは、風の嫌いな私も「風よ吹け吹け」である。一枚のわら半紙を折ってつくる素朴な折り風は年少児向き。子どもが手にしているだけで風に反応してひとりで踊りだす。年長児にはビニール風。ビニール袋を切り開き、竹ひごをセロファンテープでとめるだけで、本格的な風の出来上がり。実によく上がる。おもいおもいに絵をかきオリジナルの風が出来上がると、揃って隣の高校のグラウンドへ出かける。初めは、風を自分の背中にしよって走るだけの子どもたち。あっちこっちで糸が絡まって大騒ぎ。私は広いグラウンドを駆け回り「風上げ」の極意を手ほどきしてまわる。じきに子どもたちは、自分の風と対面しながら風を感じ、糸の張り具合を加減しながら風上げを楽しむことができるようになるのだ。いつの間にか、私も子どもたちと一緒にその醍醐味を味わい、楽しんで風の姿を体感している自分に気が付く。

(神奈川県立教育センター)